文化

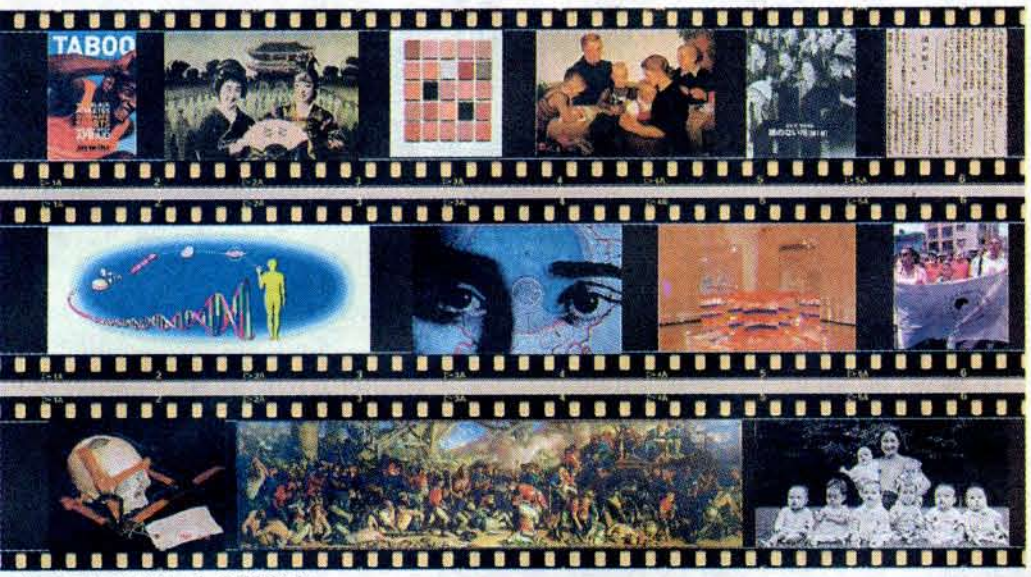
80年目の京大人文研

文理融合のため接点を模索

綾なす知 4

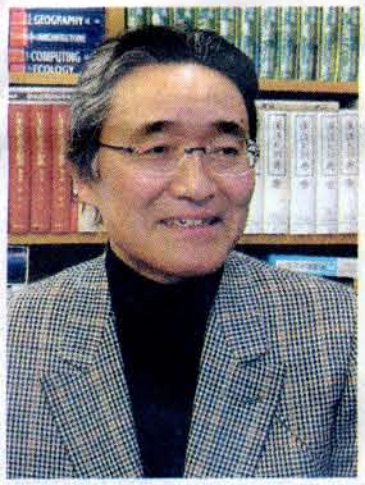
研究分野細分化で対話難しく
伝統生かし時代の要請に対応

「人種の表象と表現」をテーマにした共同研究報告書の表紙。文系、理系に分けられない問題の多様性が表れている



文系の研究者と生命科学者による共同研究の可能性を探る加藤和人准教授（左から2人目、京都市左京区・京都大）

横山俊夫京都大人文研教授



「私と皆さんのゲノム（遺伝情報）のシークエンス（塩基配列）は約99・9％同じ。残りのわずかな違いで、外見や耳あかの乾湿が決まってくる」。グラフや図を示し、京都大医学研究科附属ゲノム医学センターを率いる松田文彦教授が説明する。

「文明と言語」をテーマに取り組む京大人文科学研究所の横山俊夫教授（文明史）の共同研究の一こまだ。

最新の知見を紹介した松田教授は「ゲノム研究で問題なのは、対象となる人びとのグループを的確に示す言葉がないことです」と悩みを打ち明けた。「厳密に比較すると、関東や関西、沖縄などでも地域差が出る。特定の集団だけを調査して、『日本人の解析』と言えるか。欧州白人や米国黒人などとひとくくりにするのも、偏見を招きかねない」

共同研究の班員の専門分野は日本文化史や中国文学、民俗学、生命科学と幅広い。学外からも昆虫学や芸能史の研究者、企業経営者らが加わり、多様さは人文研でも際立つ。

「新しい現象や研究成果には新しい言葉が必要なのに、理系と文系で対話ができていない。研究分野が細分化され、言語の流通が閉塞している」と横山教授は指摘する。

各専門分野の報告に加え、江戸時代の遊郭での遊女と客のやりとりを描いた「難波鉦（なにわがね）」の輪読も、この班の特色だ。「遊郭という閉鎖空間での人間の行動と口語の質を多角的に検証することで言葉の力を磨き、現代社会の応用問題に生かしたい」という。

〈世界文化の総合的研究を目指す〉。1949年に発足した新・人文研が掲げた理念だ。ルソーやフランス革命、明治維新などを扱った共同研究は、戦中に抑圧された知識への欲求に答え、市民社会の形成を考える道標にもなった。フィールドワークによる人類学・文明史のプロジェクトも、戦後復興を経て海外に目を向け始めた日本人の好奇心を刺激した。

高度成長期以降、アカデミズムの世界でも研究分野の専門化、複雑化が進み、知識人と社会の距離は広がる。だが、地球温暖化や生命倫理の揺らぎなど科学技術だけでは手に負えない問題が浮上するのに伴い、解決への知恵を人文科学に求める声も強まってきた。

こうした中、人文研でも2000年、細分化されていた研究部門体制の改革を実施。新たな理念では「人文・社会科学にとどまらず、生命科学や地球環境などとの対話を図る」とうたった。

01年には初めての生命科学専門の研究者として加藤和人准教授（当時助教授）を迎え、03年に「生命科学と社会のコミュニケーション研究会」を発足。これまで情報システム学やコミュニケーションなどの専門家、出版関係者など多彩なゲストを講師に招いた。人文研の学際的な伝統を生かしながら、時代の新しい要請に向き合おうとする取り組みだ。

加藤准教授は「自分は科学と人文系の橋渡し役」と自任するが、「まだ準備段階」とも認める。「日本には、思想や歴史、法律など多様な分野の研究者が生命科学を議論するネットワークがない」

兼任する大学院生命科学研究科のセミナー後、若手研究者たちに呼びかける。「人文研で共同研究を立ち上げたいと模索している。ぜひ手伝ってほしい」

「文理融合」の動きは、他の文系研究者たちにも芽生えている。人種のイメージと表現をテーマに共同研究を続けてきた竹沢泰子教授（文化人類学）は昨年末、その集大成となる国際シンポジウムを開催。人種的な遺伝情報をめぐる新たな差別言説や、芸術やメディアでの人種概念など多様な報告が寄せられ、議論を展開した。

「理系の人は『我々は事実を提供しているだけ』、文系の学者は『解釈するのは人間』と立場が分かれるが、議論することで接点も相違点も実感できた」と強調する。

テクノロジーの進展は、恩恵とともに人々の不安や地球環境への影響も招く。それらをどう社会の知恵に結実させ、科学の暴走を防ぐか。新たな時代の要請は、かつてないほど高く、切実なハードルでもある。

＝毎週水曜掲載。

■メモ

人文研は戦後長く、日本部、東方部、西洋部の3部体制下で小部門制をとってきたが、2000年に大幅に再編した。17あった研究部門は、先端科学との連携も図る「文化研究創成」、諸文化の成立、継承を解明する「文化生成」、人・モノの移動から異文化間交渉を考察する「文化連関」、芸術、習俗などから文化の特徴を探る「文化表象」、主に東アジアの言語文化が対象の「文化構成」の5大部門に移行した。